

# 戦後のガレリア





# 戦後のガレリア



土田 雑魚

戦後のガレリア

深夜の住宅街。吐き出した煙のむこうに、鉄骨と、レンガの残骸を晒している廃屋。遠くの電車がレールに擦れる音がかすかに聞こえる。

あれはもう二十年も前のことだ。その当時僕は大学にうかったばかりで、学校がちかいこのあたりに住む場所を探していた。田舎から出てきたばかりの僕にはあてなんかあるはずもなく、手当たり次第に歩き回って、それらしい建物があれば片っ端からたずねて行くというのを一週間くらい繰り返した。いま考えればどこか不動産屋さんにかけてこんでいさぎよく紹介料を払ってしまったほうが、その間の民宿の宿泊代をかんがえると安くあがったのかもしれない。そのころはそういうこ

とも冷静に考えることのできない、安直で無鉄砲な学生だったのだ。

大学にはいつて一ヶ月もたつと、街の雰囲気にも慣れてきて、すっかり都会の学生気分を満喫していた。近くにカフェがあればコーヒーの味もわからなくせに通ってみたり、お洒落だという理由だけで勝手にいきつけのバーなんかもつくった。気になる女の子がいればデートに誘って、ガールフレンドもつくった。理想という理想が、手を差し出せばそのままくっついてくるような時代だった。

しかしそういうものは最初はいいけれど、慣れてしまえばただの日常でしかない。田舎の何もない退屈な暮らしと、都会の理想の暮らしは、結局のところ日常というカテゴリーのなかではイコールで結ばれてしまう。

ああ、結局なんにも変わらないなど、街をあてもなく歩いているときに、そのギャラリイを見つけた。

居住地区の隅っこに、まるで民家みたいな佇まいでそこにあつた。看板には「戦争の総て、ここに集まれり。ガレリア」とあつた。中には戦争とそれに関連する展示品がずらつと並び、奥には

ほっそりと痩せこけた丸眼鏡のオーナーがいた。頭は白髪まじりの丸坊主で、一昔前の小説家みたいな風貌だった。

僕が店に入るなり、その店主が歩いてきて「君は戦争を否定するばかりで、何も学ばない連中をどうおもうか」と訊ねてきた。

僕はとつさに「学ぶために自分の命をささげるよりは、懸命なことと思います」という言葉をのどから押し出した。すんなり出てきた台詞にしては、まともな言葉をひねりだせたなと思う。それを聞いたオーナーはなにも言わずに一通の封筒を僕に手渡した。そして「それここでは開けずに家に帰ってからじっくり読むように」と言った。

僕は素直に従った。手紙はおおまかに言えば、学生運動の誘いだった。それは戦争を企てる国家に対する、いわゆる叛乱だった。

そういえばガールフレンドが話しているのを聞いたことがある。うちの大学に限らず、周辺の大学の間で着実に活動員を増やす運動があり、どうやらその運動は、戦争を起こそうと躍起になっている政府に対しての破壊行為を主な活動としていて、兵役徴集の赤紙に対して、青派と呼ばれていた。この封筒はつまり青紙というわけだ。

次の夜、僕はガールフレンドに電話で相談すると、彼女は「戦争するのは嫌だけど、君が火炎瓶なんか投げるのを考えるのはもつといや」と言った。

その一時間後に僕はガレリアのドアを開けた。その日、僕は活動員になった。しかし火炎瓶を投げることは結局なかった。僕が活動員になった次の日の朝、国は戦争に突入したのだ。

あたりには朝から晩まで爆撃がつづき、政府がつくった防空壕で一日の大半をすごした。ガールフレンドはどうやらふたつ隣の防空壕にいるらしく、話をすることもできなかった。そればかりかこの防空壕には知り合いは一人もいなかった。唯一おなじアパートの住人がいたけれど、彼は寡黙で誰ともしやべることをしなかった。それはいないのも同然だった。

結局その後一年間をほとんど薄暗い防空壕で過ごした。幸い僕には読んだことのない本がたくさん手元にあったので、その一年は読書で暇をつぶすことができた。そしてある日の朝、けろつとしたように終戦を迎え、敗戦したわが国は敵国の占領下に置かれた。その後はあつという間に普段の生活に戻っていった。その呆気なさはまるで初夏の夕立のようだった。

しかしその激しい夕立は明らかな爪あとを残した。具体的にいえば僕はこの戦争によって三つものを失った。まずは住む場所、つぎにガールフレンド、そして大学の三つだった。三つとも爆撃によって跡形もなくきれいになくなった。しかし同時にそれは次のものへとすぐにかたちを変えたものでもあった。僕の住んでいたアパートは空き地に、ガールフレンドは次のガールフレンドに、大学は敵国の研究施設に変わった。変わるということは僕にとって、本質的に失うということだった。

逆にいえば変わらないものはいまだ存在しつづけるものであり、ただ無くなるのが僕にとって失うということにはならなかった。そしてそういうもののひとつに、ギャラリーがあった。ギャラリーは爆撃の直撃を受け、建物は鉄骨を除いて、もちろん店主も含めてきれいに吹き飛んだが、場所はどこにあり続けた。それは店主の意思がはたらいて、本物の戦争を展示し続けているかのようだった。戦争の資料や展示品の数々を、一瞬にして無に還す。それが戦争のほんとうの姿なのだ。

いまでも僕はこうしてたまにギャラリーに足を運ぶ。店主も、展示品も、客もなく、脊椎のような鉄骨だけを晒すギャラリー。それは当時の姿ではないにせよ、紛れもなく僕にとっては当時からず



つと存在しつづけ、在りつづけたガレリアだった。

最近では復興著しい都市部では先の戦争などはるか昔のように忘れ去られ、戦後という言葉ももうすぐ失われるだろう。

だからいま呼べるうちに僕は呼ばなくてはならない。

寝つきのよくない深夜などに僕はよく足を運ぶ。そこは線路からすこしはずれた高台の住宅地にある。戦争の総て、ここに集まれり。戦後のガレリア。

## 戦後のガレリア

<http://p.booklog.jp/book/53527>

著者：土田 雑魚

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tsuchida-jaco/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53527>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53527>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ